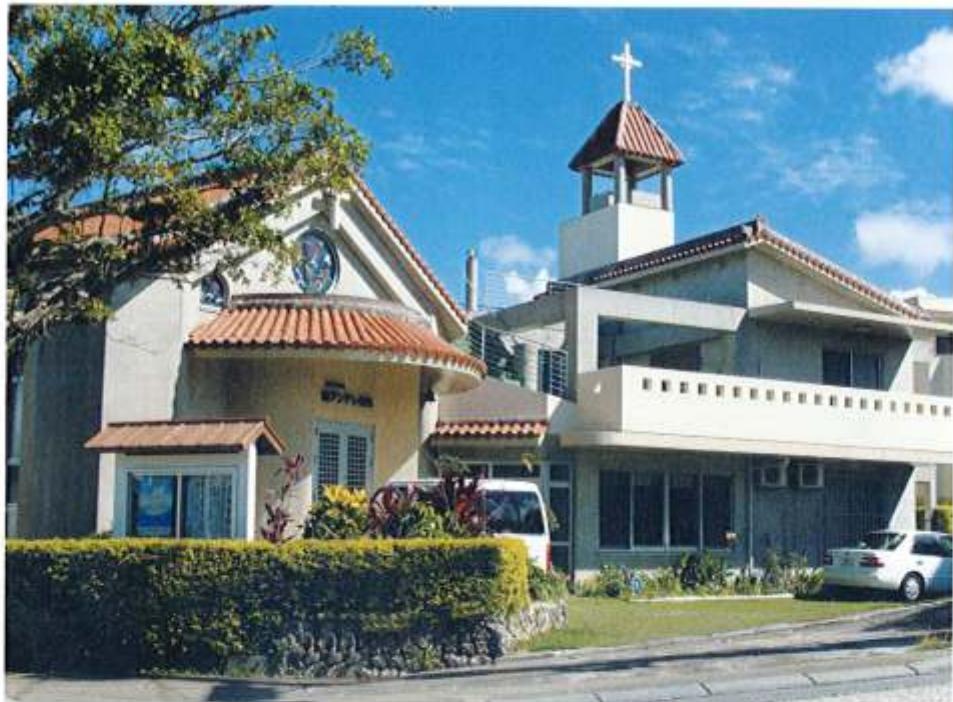


50周年記念写真  
発刊辞・祝辞



聖堂全景



2010年10月31日 50周年記念礼拝後



記念ケーキ・カッティング



信徒代表のご挨拶



琴演奏・踊り(かぎやで風)



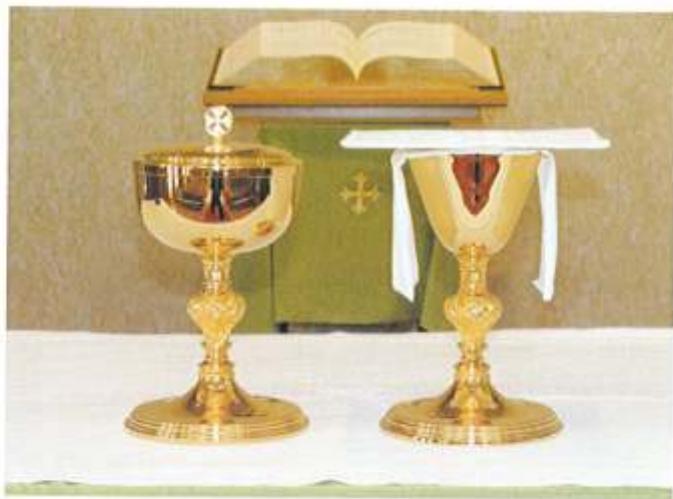
手品演出



歌遊び



踊り(クイチャー)



50周年記念チャリス・バテン・シボリウム



50周年記念鐘



50周年記念看板



## 反省の鏡、恵みの通路

司祭 パトリック・姜 勇求

主イエス・キリストの御名を賛美いたします。1年3ヶ月間の編集過程を経て、ついに「首里聖アンデレ教会設立50周年記念誌」がその姿を現しました。編集初期には想像もできなかつたこんな素晴らしい記念誌が与えられましたことは、本当に神様の御恵みであると思い、主に感謝いたします。

先輩の教役者と信徒の皆さんのご証言・思い出は、後輩の教役者と信徒にとって、いかに貴重なものでしょう。先輩の方々が、50年前のこと、30、40年前のことと思い出して書いてくださった文章を読んでみて、私は「福音書」が書かれた過程がまさにこういうものだっただろうと改めて思いました。イエス様が復活され、天に昇られてから4、50年後、弟子たちがイエス様のことを思い出し、貴重な証しを集めて記録したのが、今わたしたちに伝えられている福音書ではないでしょうか。

もちろん、この記念誌があまり素晴らしいとしても、イエス様のことを証している「福音書」とは比べるにも当たらないと思います。でも、私たちのこの記念誌に、当教会の新たなメンバーになった兄弟姉妹の「一言メッセージ」が含まれたこと、そして、「福音書」にはないたくさんの写真が載せられたことは、いかに幸なことでしょう。新しい信徒の一言は当教会の未来を語り、昔の写真は、文章がまだ言えなかったたくさんの物語を語ってくれますから。私はこの50周年記念誌が、イエス様の弟子たちのことを記録した「使徒言行録」の続編の続編の片隅でも占めることができればと、あえて望んでみます。

編集作業に与らせて頂き、信徒名簿を作成していた時でした。私は事新しく驚きました。教籍簿には、なんと279もの教籍番号がつけてあるのではないか。今まで教籍簿を見てこなかったわけではありませんが、教籍番号に拘ったことは一度もありませんでした。しかし、今回事新しく考えてみたら、教会設立から今まで、なんと279名の信徒がこの教会にいたのです。普段3、40名ぐらいの信



徒が主日礼拝に出席している当教会に、279名の信徒！

日本の地、沖縄の地は宣教において良い地ではないかもしれません。福音の種が蒔かれて、短期間で100倍の実、60倍の実、30倍の実を結ぶ良い土地ではないかもしれません。もしかしたら、道端、石だらけの土の少ない地、あるいは茨の間であるかもしれません。しかし、私は福音の種がこちら沖縄の首里にも蒔かれて、僅かの良い土地で実を結んできたことが分かりました。一つ一つの実が結ばれる度に、神様はきっと微笑みながら喜んでおられたでしょう。

私たちは教会設立50周年を迎えました。50周年は特別な意味を持っています。聖書は50年目の年を「ヨベルの年」と言います(レビ記25章8~12節)。「ヨベルの年」は、解放の年です。50年目の年は、神様の定められた法則によって負い目を返し、皆が最初の所に戻って行って、神様の恵みを頂いて、知恵と勇気と力、そして、新しい希望を頂いて、もう一度新たに始める年あります。



私たちは、古い50年が終わり新しい50年が始まる「ヨベルの年」を迎える特権を受けています。神様はこの時点に、279の実の中で僅かの私たちを残しておかされました。なぜ神様は「ヨベルの年」であるこの時点に私たちを残しておかれただのしょうか？多くの実を結ぶ種にならせるためではないでしょうか？イエス様は言われました。「はっきり言っておく。一粒の麦は、地に落ちて死ななければ、一粒のままである。だが、死ねば、多くの実を結ぶ」(ヨハ12:24)。私たち一人一人が一粒の麦になって地に落ちて死ねば、これから先50年後には、多くの実が結んでいることでしょう。きっと30倍、60倍、100倍の実が結んでいると信じます。

こんな素晴らしい記念誌が出来るまで、去る1年3ヶ月の間、労を惜しまなかつた編集委員の皆様に、ことに、原稿依頼・写真収集の段階からご尽力くださった編集委員長の山川宗雄兄に深く感謝いたします。どうか、この記念誌がこれからの先50年の宣教において反省の鏡となり、また、知恵と勇気と力を与える神様の恵みの通路となりますように。

## 祝 辞

### 教会設立50周年 あめでとうございます

主教 ダビデ・谷 昌二

「あなたは安息の年を七回、すなわち七年を七度数えなさい。七を七倍した年は四十九年である。その年の第七の月の十日の贖罪日に、雄羊の角笛を鳴り響かせる。あなたたちは国中に角笛を吹き鳴らして、この五十年目の年を聖別し、全住民に解放の宣言をする。それが、ヨベルの年である。あなたたちはおのおのその先祖伝来の所有地に帰り、家族のもとに帰る。五十年目はあなたたちのヨベルの年である。種蒔くことも、休閑中の畠に生じた穀物を収穫することも、手入れせずにいたぶどう畠の実を集めることもしてはならない。この年は聖なるヨベルの年だからである。あなたたちは野に生じたものを食物とする。」（レビ記25章8～12節）



首里聖アンデレ教会、教会設立50周年おめでとうございます。何よりも、この日に至るまで、豊かな恵みとお導きを下さいました父なる神に感謝しましょう。そして、その神に仕え、奉仕をして来られました歴代の聖職の方々に、又、その働きと共にし、しっかりと支えて来られました信徒の皆様に、心より感謝申し上げます。

50年前といえば、1960年。この年の10月30日に、当之蔵の大学食堂の2階で、琉大カンタベリー・クラブのメンバーが中心になって、12名の会衆が集まり、聖餐式を捧げ、教会が設立されました。以後、教会の土地が定まるまで諸般の苦労がありましたが、1970年5月5日に、待望の礼拝堂・牧師館・学生センターが与え

られ、ブラウニング主教によって聖別されました。

私が大学に入学したのが1960年です。私も又、この60年から70年にかけての激しい学園紛争、安保闘争、ベトナム反戦運動の波にもまれて過ごしてきましたから、丁度、聖アンデレ教会が生まれ育った時を同じくして、何かそ



の当時の教会の雰囲気が理解できるように感じます。私の故郷の八木キリスト教会も、大学生、高校生で溢っていました。聖書を学び、障害者の施設を訪問、又、ハイキング、夏のキャンプ、クリスマス、そして、小学生、中学生を教える塾の経営など、教会の働きの中心を青年会が担っていました。教会生活が楽しくて仕方がなかった時でもありました。が、やがて、学園紛争も下火になり、高度経済成長の波に飲まれ、若者の姿が教会から消えて行くようになりました。これは、全国どこでも同じ道を辿って来たように思います。

今、ここで反省することは、この教会生活が一番楽しいと感じていたその時に、教会の一番大事な「宣教の使命」をはっきりと学ぶことがなかったということです。主イエスの十字架の苦しみと死、人間のすべての限界を捧げ切って神に委ね、それを越えて復活された主。私たちが新しい命に生かされる喜びへと招いて下さるその喜びを、しっかりと受け止めながら、それを宣べ伝える働きへと、私たち一人ひとりが遣わされていることを明確に教えられて来なかつたことが、現代の教会の成長の妨げとなっていると感じています。

旧約聖書によると50年目は、元に戻る年です。人間の業を全て止めて、ただひたすら神の業に委ね、神の御心の平安にお任せする。そこから、もう一度、新しい力を頂いて、立ち上がり、歩み始める時として定められています。父なる神が、天に備えて下さっている豊かな新しい命の喜びを、今、しっかりと全身で受け止め、その喜びを伝えるよき働きへと歩み出して行きましょう。新しい50年が豊かに祝福されますようにお祈りします。



## カンタベリークラブの復活を祈りつつ

退職主教 パウロ・仲村實明



50周年ですか、夫婦なら金婚式。旧約聖書では「ヨベルの年」(レビ記25章、民数記36章)で、売られた土地は本の所有者に帰り、奴隸は皆解放された。この制度はキリストの来臨によって成就した。

さて沖縄の伝道は1846年イギリス海軍からの医療宣教師ペッテルハイムによって始められた。その後1927年、青木恵哉伝道師(後に執事)によって愛樂園の成立へとつながるが、組織的伝道は1951年のゴッドフリー・ヘフナー司祭によって沖縄聖公会が開拓されたのを第1期とするなら、1960年代のハイオ司祭の第2期、山本司祭が首里の学生食堂の二階を借りて、学生運動カンタベリークラブの活動を中心に首里聖アンデレ教会の最初の聖餐式を挙行したのがその発端となったのである。

先ず教会の敷地が欲しいとの話しに、三原教会の川平朝申さんが食指を動かし、尚家の護得久朝光さんから玉陵前の土地を購入し、土地聖別式を挙行し、文化財保護委員の承認を得て、学生センター並びに首里聖アンデレ教会の建築に取りかかった。ところが聖公会の工事の前に赤旗が立った。「沖縄の文化を守る会」と名乗る人々の反対運動に出会ったのである。マスコミも騒ぎ出し、聖公会は有名になった。当時川平さんは、尚家とのゆかりのある人であり、文化財保護委員であり、聖公会の信徒でした。

聖公会は、イギリスでパッキンガム宮殿を通して、王家の菩提寺を守っている。その様に沖縄聖公会が、王陵を通して尚家の菩提寺を守ると言うのです。私は聖公会という教会に誇りを持ち、伝道に励もうと心を燃やしたもので。そのうち、アメリカ人の歴史家ジョージ・カーブ博士の入れ知恵で、ケネディ主教から工事のストップの命令がかかった。さすが赤旗に強かったハイオ司祭も、主教の命令にはさからえず、工事を断念した。そして、沖縄に



自分達の主教が欲しいとうなだれた姿は忘れられない。その想いがやがて沖縄教区の誕生につながったものと思う。山本司祭は失意のうちに沖縄を去り、暫くの間、三原と合同して礼拝を守った。

その後神戸より来島した西川司祭はアパートを借りて礼拝を始め、教会の建築へと進み現在地に鉄筋二階建て、一階は礼拝堂、二階は学生センター及び司祭館で、途中岡崎司祭と交替し聖別落成式が挙行された。琉大だけでなく沖縄大学迄手を伸ばし、池原司祭の時代には更に嘉数学園女子短大、並びに高校迄手を広げた。

やがて新城司祭の時代、司祭館と礼拝堂は分離した方が良いという事で、新しい現在の礼拝堂になった。新城司祭の定年退職に伴い、目崎執事(後司祭)、姜司祭と続き、首里の守礼の門の観光地を前にして伊是名聖霊教会の鐘と共に、首里城と尚家を守っているのです。首里聖アンデレ教会の設立50周年にあたり、初期の思い出を語る事によりカンタベリークラブの復活を祈るものです。益々の御発展を祈り、御祝いの辞と致します。

